

# 赤い部屋

江戸川乱歩

青空文庫



異常な興奮を求めて集った、七人のしかつめらしい男が（私もその中の一人だった）態わざ々ざわざ其その為ためにしつらえた「赤い部屋」の、緋色ひいろの天鷲絨びろうどで張った深い肘掛椅子に凭もたれ込んで、今晚の話手が何事か怪異な物語を話し出すのを、今か今かと待まち構かまえていた。

七人の真中には、これも緋色の天鷲絨で覆おおわれた一つの大きな円卓まるテーブルの上に、古風な彫刻のある燭しよく台だいにさされた、三さん挺ちようの太い蠟燭ろうそくがユラユラと幽かすかに揺れながら燃えていた。

部屋の四周には、窓や入口のドアさえ残さないで、天井から床まで、真紅まっかな重々しい垂た絹れぎぬが豊かな襞ひだを作つて懸けられていた。ロマンチックな蠟燭の光が、その静脈から流れ出したばかりの血の様にも、ドス黒い色をした垂絹の表に、我々七人の異様に大きな影かげぼ法師うしを投げていた。そして、その影法師は、蠟燭の焰につれて、幾つかの巨大な昆虫でもあるかの様に、垂絹の襞の曲線の上を、伸びたり縮んだりしながら這い歩いていた。

いつもながらその部屋は、私を、丁度とほうもなく大きな生物の心臓の中に坐つてでもいる様な気持にした。私にはその心臓が、大きさに相応したのろさを以もつて、ドキンドキんと脈うつ音さえ感じられる様に思えた。

誰も物を云わなかった。私は蠟燭をすかして、向側に腰掛けた人達の赤黒く見える影の多い顔を、何ということなしに見つめていた。それらの顔は、不思議にも、お能の面の様に無表情に微動さえしないかと思われた。

やがて、今晚の話手と定められた新入会員のT氏は、腰掛けたままで、じつと蠟燭の火を見つめながら、次の様に話し始めた。私は、陰影の加減で骸骨の様に見える彼の顎が、物を云う度にガクガクと物淋しく合わさる様子を、奇怪なからくり仕掛けの生人形でも見る様な気持で眺めていた。

私は、自分では確かに正気の積りでいますし、人も亦またその様に取扱くつて呉くれていますけれど、真実まこと正気なのかどうか分かりません。狂人かも知れません。それ程でないとしても、何かの精神病者という様なものかも知れません。兎とに角かく、私という人間は、不思議な程この世の中がつまらないのです。生きていくという事が、もうもう退屈で退屈で仕様がなないのです。

初めの間は、うちでも、人並みに色々の道楽ふけに耽ふけつた時代もありましたけれど、それが何一つ私の生れつきの退屈なぐさを慰なぐさめては呉くれないで、却かえつて、もうこれで世の中の面白いことと

いうものはお仕舞なのか、なあんだつまらないという失望ばかりが残るのです。で、段々、私は何かをやるのが臆おっくう劫おっくうになつて来ました。例えば、これこれの遊びは面白い、きつとお前を有頂天にして呉れるだろうという様な話を聞かされますと、おお、そんなものがあつたのか、では早速やつて見ようと乗気になる代りに、まず頭の中でその面白さを色々想像して見るのです。そして、さんざん想像を廻めぐらした結果は、いつも「なあに大したことはない」とみくびつて了しまうのです。

そんな風で、一時私は文字通り何もしないで、ただ飯を食つたり、起きたり、寝たりするばかりの日を暮していました。そして、頭の中丈だけで色々な空想を廻らしては、これもつまらない、あれも退屈だと、片端かたはしからけなしつけながら、死ぬよりも辛い、それでいて人目には此このうえ上このうえもなく安易な生活を送っていました。

これが、私とその日その日のパンに追われる様な境遇だつたら、まだよかつたのでしよう。仮令強たしえいられた労働にしろ、兎に角何かすることがあれば幸福です。それとも又、私が飛切りの大金持でもあつたら、もつとよかつたかも知れません。私はきつと、その大金の力で、歴史上の暴君達がやった様なすばらしい贅ぜいたく沢たくや、血ちなまぐさ腥いい遊戯や、その他様々の楽しみに耽ふけることが出来たでありますようが、勿論それもかなわぬ願いだとしま

すと、私はもう、あのお伽とぎばなし 噺にある物臭太郎の様に、一層死んで了った方がましな程、淋しくものういその日その日を、ただじつとして暮す他はないのでした。

こんな風に申上げますと、皆さんはきつと「そうだろう、そうだろう、併し世の中の事柄に退屈し切っている点では我々だって決してお前にひけを取りはしないのだ。だからこんなクラブを作って何とかして異常な興奮を求めようとしているのではないか。お前もよく退屈なればこそ、今、我々の仲間へ入って来たのであろう。それはもう、お前の退屈していることは、今更ら聞かなくてもよく分っているのだ」とおっしゃるに相違ありません。ほんとうにそうです。私は何もくどくどと退屈の説明をする必要はないのでした。そして、あなた方が、そんな風に退屈がどんなものだかをよく知っていらつしやると思えばこそ、私は今夜この席に列して、私の変てこな身の上話をお話ししようと決心したのでした。

私はこの階下のレストランへはしよつちゆう出入でいりしてしまして、自然ここにいらつしやる御主人とも御心安く、大分以前からこの「赤い部屋」の会のことを聞知つていたばかりでなく、一いっさい再ならず入会することを勧められてさいいました。それにも拘かかわらず、そんな話には一も二もなく飛びつき相そうな退屈屋の私が、今日まで入会しなかつたのは、私が、失

礼な申分かも知れませんが、皆さんなどは比べものにならぬ程退屈し切っていたからです。退屈し過ぎていたからです。

犯罪と探偵の遊戯ですか、こうれいじゆつ降霊術其他の心霊上の様々の実験ですか、Obscene Pictureの活動写真や実演やその他のセンジュアルな遊戯ですか、刑務所や、瘋癲病院や、解剖学教室などの参観ですか、まだそういうものに幾らかでも興味を持ち得るあなた方は幸福です。私は、皆さんが死刑執行のすき見を企てていられると聞いた時でさえ、少しも驚きはしませんでした。といいますのは、私は御主人からそのお話のあつた頃には、もうそういうありふれた刺戟しげきには飽き飽きしていたばかりでなく、ある世にもすばらしい遊戯、といつては少し空恐しい気がしますが、私にとつては遊戯といつてもよい一つの事柄を発見して、その楽しみに夢中になつていたからです。

その遊戯というのは、突然申上げますと、皆さんはびっくりなさるかも知れませんが：  
 …、人殺しなんです。ほんとうの殺人なんです。しかも、私はその遊戯を発見してから今日までに百人に近い男や女や子供の命を、ただ退屈をまぎらす目的の為ばかりに、奪つて来たのです。あなた方は、では、私が今その恐ろしい罪悪を悔悟かいごして、懺悔ざんげ話をしようとしているかと早合点なさるかも知れませんが、ところが、決してそうではないのです。私

は少しも悔悟なぞしてはいません。犯した罪を恐れてもいません。それどころか、ああ何ということでしょう。私は近頃になってその人殺しという血腥い刺戟にすら、もう飽きあきして了つたのです。そして、今度は他人ではなくて自分自身を殺す様な事柄に、あの阿片ヘンの喫煙に耽り始めたのです。流石さすがにこれだけは、そんな私にも命は惜しかったと見えまして、我慢に我慢をして来たのですけれど、人殺しさえあきはてては、もう自殺でも目論もくろむ外には、刺戟の求め様がないではありませんか。私はやがて程なく、阿片の毒の為に命をとられて了うでしょう。そう思いますと、せめて筋路の通つた話の出来る間に、私は誰れかに私のやつて来た事を打開けて置き度いのです。それには、この「赤い部屋」の方々が一番ふさわしくはないでしょうか。

そういう訳で、私は実は皆さんのお仲間入りがし度い為ではなくて、ただ私のこの変な身の上話を聞いて貰い度いばかりに、会員の一人に加えて頂いたのです。そして、幸いにも新入会の者は必ず最初の晩に、何か会の主旨に副そう様なお話をしなければならぬ定めきになつていましたのでこうして今晚その私の望みを果す機会をとらえることが出来た次第なのです。

それは今からざつと三年計りばか以前のことでした。その頃は今も申上げました様に、あら



ゆる刺戟に飽きはてて何の生甲斐もなく、丁度一匹の退屈という名前を持った動物でもある様に、ノラリクラーリと日を暮っていたのですが、その年の春、といつてもまだ寒い時分でしたから多分二月の終りか三月の始め頃だったのでしよう、ある夜、私は一つの妙な出来事にぶつかったのです。私が百人もの命をとる様になったのは、実にその晩の出来事が動機を為したのでした。

どこかで夜更しをした私は、もう一時頃でしたらうか。少し酔っぱらっていたと思えます。寒い夜なのにブラブラと俾にも乗らないで家路を辿っていました。もう一つ横町を曲ると一町ばかりで私の家だという、その横町を何気なくヒョイと曲りますと、出会頭に一人の男が、何か狼狽している様子で慌ててこちらへやって来るのにバツタリぶつかりました。私も驚きましたが男は一層驚いたと見えて暫く黙って衝つ立っていましたが、おぼろげな街燈の光で私の姿を認めるといきなり「この辺に医者はないか」と尋ねるではありませんか。よく訊いて見ますと、その男は自動車の運転手で、今そこで一人の老人を（こんな夜中に一人でうろついていた所を見ると多分浮浪の徒だったのでしよう）轢倒して大怪我をさせたというのです。なる程見れば、すぐ二三間向うに一台の自動車が停つていて、その側に人らしいものが倒れてウーウーと幽かにうめいています。交番といつても大

分遠方ですし、それに負傷者の苦しみがひどいので、運転手は何はさて置き先ず医者を探そうとしたのに相違ありません。

私はその辺の地理は、自宅の近所のことですから、医院の所在などもよく弁えていたので早速こう教えてやりました。

「ここを左の方へ二町ばかり行くと左側に赤い軒燈の点いた家がある。M医院というのだ。そこへ行つて叩き起したらいいだろう」

すると運転手はすぐ様助手に手伝わせて、負傷者をそのM医院の方へ運んで行きました。私は彼等の後ろ姿が闇の中に消えるまで、それを見送っていましたが、こんなことに係合つていてもつまらないと思ひましたので、やがて家に帰つて、——私は独り者なんです。

——婆ばあの敷しいて呉これた床とこへ這はい入つて、酔よつていたからでしょう、いつになくすぐに眠ねい入つて了しいました。

実際何でもない事です。若もし私わたしがその儘ままその事件を忘れて了しいさえしたら、それきり限りの話はなしだったので。ところが、翌日眼まなこを醒さました時、私は前夜ちよつとの一いち寸すんした出来事をまだ覚えていました。そしてあの怪我人は助かつたかしらなどと、要もないことまで考え始めたものです。すると、私はふと変なことに気がつきました。

「ヤ、俺は大変な間違いをしてしまったぞ」

私はびっくりしました。いくら酒に酔っていたとは云え、決して正気を失っていた訳ではないのに、私としたことが、何と思つてあの怪我人をM医院などへ担ぎ込ませたのでしょうか。

「ここを左の方へ二町ばかり行くと左側に赤い軒燈の点いた家がある……」

というその時の言葉もすっかり覚えています。なぜその代りに、

「ここを右の方へ一町ばかり行くとK病院という外科専門の医者がある」

と云わなかったのでしょうか。私の教えたMというのは評判の藪医者で、しかも外科の方  
は出来るかどうかさえ疑わしかった程なのです。ところがMとは反対の方角でMよりはも  
つと近い所に、立派に設備の整ったKという外科病院があるではありませんか。無論私は  
それをよく知っていた筈なのです。知つていたのに何故間違つたことを教えたか。その時  
の不思議な心理状態は、今になつてもまだよく分りませんが、恐らく朧忘れとでも云う  
のでしょうか。

私は少し気懸りになつて来たものですから、婆やにそれとなく近所の噂などを探らせて  
見ますと、どうやら怪我人はM医院の診察室で死んだ鹽梅なのです。どこの医者でもそ

んな怪我人なんか担ぎ込まれるのは厭いやがるものです。まして夜半の一時と云うのですから、無理ありませんがM医院ではいくら戸を叩いても、何のかんのと云つて却なかなか々開けて呉れなかつたらしいのです。さんざん暇ひまどらせた挙句やつと怪我人を担ぎ込んだ時分には、もう余程手遅れになつていたに相違ありません。でも、その時若しM医院の主が「私は専門医でないから、近所のK病院の方へつれて行け」とでも、指図をしたなら、或あるは怪我人は助つていたのかも知れませんが、何という無茶なことでしょう。彼は自からその難しい患者を処理しようとしたらしいのです。そしてしくじつたのです、何んでも噂によりましてM氏はうろたえて了つて、不当に長い間怪我人をいじくりまわしていたとかいうことです。

私はそれを聞いて、何だかこう変な気持になつて了いました。

この場合可哀相な老人を殺したものは果して何なん人びとでしょうか。自動車の運転手とM医師ともに、夫それぞれ々責任のあることは云うまでもありません。そしてそこに法律上の処罰があるとするれば、それは恐らく運転手の過失に対して行われるのでしょうか、事実上最も重大な責任者はこの私だったのでありますまいか。若しその際私がM医院でなくてK病院を教えてやつたとすれば、少しのへまもなく怪我人は助かつたのかも知れないのです。運

転手は単に怪我をさせたばかりです。殺した訳ではないのです。M医師は医術上の技倆が劣っていた為にしくじったのですから、これもあながち咎める所はありません。よし又彼に責を負うべき点があつたとしても、その元はと云えば私が不適當なM医院を教えたのが悪いのです。つまり、その時の私の指図次第によつて、老人を生かすことも殺すことも出来た訳なのです。それは怪我をさせたのは如何にも運転手でしょう。けれど殺したのはこの私だつたのではありますまいか。

これは私の指図が全く偶然の過失だつたと考えた場合ですが、若しそれが過失ではなくて、その老人を殺してやろうという私の故意から出たものだつたとしたら、一体どういふことになるのでしょうか。いうまでもありません。私は事実上殺人罪を犯したものではありませんか。併し法律は仮令転手を罰することはあつても、事実上の殺人者である私というものに対しては、恐らく疑いをかけさえないでしょう。なぜと云つて、私と死んだ老人とはまるきり関係のない事がよく分つているのですから。そして仮令疑いをかけられたとしても、私はただ外科医院のあることなど忘れていたと答えさえすればよいではありませんか。それは全然心の中の問題なのです。

皆さん。皆さんは嘗つてこういう殺人法について考えられたことがありませんか。

私はこの自動車事件で始めてそこへ気がついたのですが、考えて見ますと、この世の中は何というけんごんしごく險難至極な場所なのでしよう。いつ私の様な男が、何の理由もなく故意に間違つた医者を教えたりして、そうでなければ取止めることが出来た命を、不当に失つて了う様な目に合うか分つたものではないのです。

これはその後私が実際やつて見て成功したことなのですが、田舎のお婆さんが電車線路を横切ろうと、まさに線路に片足をかけた時に、無論そこには電車ばかりでなく自動車や自転車や馬車や人力車などが織る様に行違つていますから、そのお婆さんの頭は十分混乱しているに相違ありません。その片足をかけた刹那に、急行電車か何かしつぷうが疾風の様にやつて来てお婆さんから二三間の所まで迫つたと仮定します。その際、お婆さんがそれに気附かないでそのまま線路を横切つて了えば何のことはないのですが、誰かが大きな声で「お婆さん危いッ」と怒鳴りでもしようものなら、たちま忽ち慌てて了つて、そのままつき切りうか、一度後へ引返そうかと、しばら暫くまごつくに相違ありません。そして、若しその電車が、余り間近い為に急停車も出来なかつたとしますと、「お婆さん危いッ」というたつた一言が、そのお婆さんに大怪我をさせ、悪くすれば命までも取つて了わないうとは限りません。先きも申上げました通り、私はある時この方法で一人の田舎者をまんまと殺して了つ

たことがありますよ。

(T氏はここで一寸言葉を切つて、気味悪く笑つた)

この場合「危いッ」と声をかけた私は明かに殺人者です。併し誰が私の殺意を疑いましょう。何の恨みもない見ず知らずの人間を、ただ殺人の興味の為ばかりに、殺そうとしてゐる男があらうなどと想像する人がありましようか。それに「危いッ」という注意の言葉は、どんな風に解釈して見たつて、好意から出たものとか考えられないのです。表面上では、死者から感謝されこそすれ決して恨まれる理由がないのです。皆さん、何と安全至極な殺人法ではありませんか。

世の中の人は、悪事は必ず法律に触れ相当の処罰を受けるものだと思つて、愚にも安心し切つてゐます。誰にしたつて法律が人殺しを見逃そうなどは想像もしないので。ところがどうでしょう。今申上げました二つの実例から類推出来る様な少しも法律に触れる氣遣いのない殺人法が考えて見ればいくらもあるではありませんか。私はこの事に氣附いた時、世の中というものの恐ろしさに戦慄するよりも、そういう罪惡の余地を残して置いて呉れた造物主の余裕を此上もなく愉快に思いました。ほんとうに私はこの発見に狂喜しました。何とすばらしいではありませんか。この方法によりさえすれば、大正の聖代せいだいに

この私丈けは、謂わば斬捨て御免ごめんも同様なのです。

そこで私はこの種の人殺しによつて、あの死に相な退屈をまぎらすことを思いつきました。絶対に法律に触れない人殺し、どんなシャーロック・ホームズだつて見破ることの出来ない人殺し、ああ何という申分のない眠け醒しでしょう。以来私は三年の間というものを殺す楽しみに耽つて、いつの間にかさしもの退屈をすっかり忘れはてていました。皆さん笑つてはいけません。私は戦国時代の豪傑の様に、あの百人斬りを、無論文字通り斬る訳ではありませんけれど、百人の命をとるまでは決して途中でこの殺人を止めないことを、私自身に誓つたのです。

今から三月ばかり前です、私は丁度九十九人だけ済ませました。そして、あと一人になつた時先にも申上げました通り私はその人殺しにも、もう飽きあきしてしまつたのですが、それは兎も角、ではその九十九人をどんな風にして殺したか。勿論九十九人のどの人にも少しだつて恨みがあつた訳ではなく、ただ人知れぬ方法とその結果に興味を持ってやった仕事ですから、私は一度も同じやり方を繰返す様なことはしませんでした。一人殺したあとでは、今度はどんな新工夫でやつつけようかと、それを考えるのが又一つの楽しみだつたのです。



併し、この席で、私のやった九十九の異った殺人法を悉く御話する暇ありませんし、それに、今夜私がここへ参りましたのは、そんな個々の殺人方法を告白する為ではなくて、そうした極悪非道の罪悪を犯してまで、退屈を免れ様とした、そして又、遂にはその罪悪にすら飽きはてて、今度はこの私自身を亡ぼそうとしている、世の常ならぬ私の心持をお話して皆さんの御判断を仰ぎたい為なのですから、その殺人方については、ほんの二三の実例を申上げるに止めて置き度いと存じます。

この方法を発見して間もなくのことでしたが、こんなこともありました。私の近所に一人の按摩あんまがいます、それが不具などによくあるひどい強情者でした。他人が深切しんせつから色々注意などしてやりますと、却つてそれを逆にとつて、目が見えないと思つて人を馬鹿にするなそれ位のこととはちゃんと俺にだつて分つているわいという調子で、必ず相手の言葉にさからつたことをやるのです。どうして並み並みの強情さではないのです。

ある日のことでした。私がある大通りを歩いていきますと、向うからその強情者の按摩がやつて来るのに出逢いました。彼は生意気にも、杖つえを肩に担いで鼻唄を歌いながらヒョッコリヒョッコリと歩いていきます。丁度その町には昨日から下水の工事が始まっていて、往來の片側には深い穴が掘つてありましたが、彼は盲人のことで片側往來止めの立札など見

えませんか、何の気もつかず、その穴のすぐ側を吞気そうに歩いているのです。

それを見ますと、私はふと一つの妙案を思いつきました。そこで、

「やあN君」と按摩の名を呼びかけ、（よく療治を頼んでお互に知り合っていたのです）

「ソラ危いぞ、左へ寄った、左へ寄った」

と怒鳴りました。それを態わざと少し冗談らしい調子でやったのです。というのは、こうい  
えば、彼は日頃の性質から、きつとからかわれたのだと邪推して、左へはよらないで態と  
右へ寄るに相違ないと考えたからです。案あんじょうの定彼は、

「エへへへ……。御冗談ばかり」

などと声こわいろ色めいた口返答をしながら、矢庭やにわに反対の右の方へ二足三足寄ったものでは  
から、忽ち下水工事の穴の中へ片足を踏み込んで、アツという間に一丈もあるその底へと  
落ち込んでしまいました。私はさも驚いた風を装うて穴の縁へ駈けより、

「うまく行ったかしら」と覗いて見ましたが彼はうち所でも悪かったのか、穴の底にぐつ  
たりと横よこたわって、穴のまわりに突出ている鋭い石でついたのでしょう。一分刈りの頭に、  
赤黒い血がタラタラと流れているのです。それから、舌でも噛切ったと見えて、口や鼻か  
らも同じ様に出血しています。顔色はもう蒼白で、唸り声を出す元氣さえありません。

こうして、この按摩は、でもそれから一週間ばかりは虫の息で生きていましたが、遂に絶命して了ったのです。私の計画は見事に成功しました。誰が私を疑いましょう。私はこの按摩を日頃鼻<sup>ひいき</sup>にしておく呼んでいた位で、決して殺人の動機になる様な恨みがあつた訳ではなく、それに、表面上は右に陷<sup>おとしあな</sup> 穽のあるのを避けさせようとして、「左へよれ、左へよれ」と教えてやった訳なのですから、私の好意を認める人はあつても、その親切らしい言葉の裏に恐るべき殺意がこめられていたと想像する人があろう筈はないのです。

ああ、何という恐しくも楽しい遊戯だったのでしよう。巧妙なトリックを考え出した時の、恐らく芸術家のそれにも匹敵する、歓喜、そのトリックを実行する時のワクワクした緊張、そして、目的を果した時の云い知れぬ満足、それに又、私の犠牲になつた男や女が、殺人者が目の前にいるとも知らず血みどろになつて狂い廻る断<sup>だんまつま</sup>末魔の光<sup>ありさま</sup>景、最初の間、それらが、どんなにまあ私を有頂天にして呉れたことでしょう。

ある時はこんな事もありました。それは夏のどんよりと曇つた日のことでしたが、私はある郊外の文化村とでもいうのでしよう。十軒余りの西洋館がまばらに立並んだ所を歩いていました。そして、丁度その中でも一番立派なコンクリート造りの西洋館の裏手を通りかかった時です。ふと妙なものが私の目に止りました。といいますのは、その時私の鼻先

をかすめて勢よく飛んで行つた一匹の雀が、その家の屋根から地面へ引張つてあつた太い針金に一寸とまると、いきなりはね返された様に下へ落ちて来て、そのまま死んで了つたのです。

変なこともあるものだと思つてよく見ますと、その針金というのは、西洋館の尖つた屋根の頂上に立つている避雷針ひらいしんから出ていることが分りました。無論針金には被覆が施されていきましたけれど、今雀のとまつた部分は、どうしたことかそれがはがれていたので。私は電気のごとはよく知らないのですが、どうかして空中電気的作用とかで、避雷針の針金に強い電流が流れることがあると、どこかで聞いたのを覚えていて、さてはそれだなど気附きました。こんな事に出くわしたのは初めてだったものですから、珍らしいことと思つて、私は暫らくそこに立止つてその針金を眺めていたものです。

すると、そこへ、西洋館の横手から、兵隊ごつこかなにかして遊んでいるらしい子供の一団が、ガヤガヤ云いながら出て来ましたが、その中の六ツか七つの小さな男の子が、外ほかの子供達はさつさと向うへ行つて了つたのに、一人あとに残つて、何をするのかと見ていますと、今の避雷針の針金の手前の小高くなつた所に立つて、前をまくると、立小便を始めました。それを見た私は、又もや一つの妙計を思いつきました。私は中学時代に水が電

気の導体だということを習ったことがあります。今子供が立っている小高い所から、その針金の被覆のとれた部分へ小便をしかけるのは訳のないことです。小便は水ですからやっぱり導体に相違ありません。

そこで私はその子供にこう声をかけました。

「おい坊っちゃん。その針金へ小便をかけて御覧。とどくかい」

すると子供は、

「なあに訳ないや、見てて御覧」

そういったかと思うと、姿勢を換えて、いきなり針金の地の現れた部分を目掛けて小便をしかけました。そして、それが針金に届くか届かないに、恐ろしいものではありませんか、子供はビヨンと一つ踊る様に跳上ったかと思うと、そこへバツタリ倒れてしまいました。あとで聞けば、避雷針にこんな強い電流が流れるのは非常に珍らしいことなのだ相ですが、か様にして、私は生れて始めて、人間の感電して死ぬ所を見た訳です。

この場合も無論、私は少しだつて疑いを受けない心配はありませんでした。ただ子供の死骸に取<sup>とりすが</sup>継<sup>つ</sup>つて泣入っている母親に鄭<sup>てい</sup>重<sup>ちゆう</sup>な悔みの言葉を残して、その場を立去りさえすればよいのでした。

これもある夏のことでした。私はこの男を一つ犠牲いけにえにしてやろうと目ざしていたある友人、と云つても決してその男に恨みがあった訳ではなく、長年の間無二の親友としてつき合っていた程の友達なのですが、私には却つて、そういう仲のいい友達などを、何にも云わないで、ニコニコしながら、アツという間に死骸にして見たいという異常な望みがあったのです。その友達と一緒に、房州のごく辺鄙なある漁師町へ避暑に出かけたことがあります。無論海水浴場という程の場所ではなく、海にはその部落の赤銅色しゃくどういろの肌をした小わっぱ達がバチャバチャやっている丈だけで、都会からの客とっては私達二人の外には画学生らしい連中が数人、それも海へ入るといよりは其辺の海岸をスケッチブック片手に歩き廻めぐっているに過すませんでした。

名の売れている海水浴場の様に、都会の少女達の優美な肉体が見られる訳ではなく、宿といつても東京の木賃宿きちんやど見たいなもので、それに食物もさしみの外のはまづくて口に合わず、随分淋しい不便な所ではありましたが、その私の友達というのが、私とはまるで違つて、そうした鄙ひなびた場所で孤独な生活を味あじわうのが好きな方でしたのと、私は私で、どうかしてこの男をやつつける機会を掴つかもうとあせっていた際さいだったものですから、そんな漁師町に数日の間も落ちついていることが出来たのです。

ある日、私はその友達を、海岸の部落から、大分隔った所にある、一寸断崖見たいになった場所へ連れ出しました。そして「飛込みをやるのには持つて来いの場所だ」などと言いながら、私は先に立つて着物を脱いだものです。友達もいくらか水泳の心得があつたものですから「なる程これはいい」と私にならつて着物をぬぎました。

そこで、私はその断崖のはしに立つて、両手を真直ぐに頭の上に伸ばし「一、二、三」と思切りの声で怒鳴つて置いて、ピョンと飛び上ると、見事な弧を描いて、さかしまに前の海面へと飛込みました。

パチャンと身体が水についた時に、胸と腹の呼吸でスイと水を切つて、僅か二三尺わすもぐ潜る丈で、飛魚の様に向うの水面へ身体を現すのが「飛込み」の骨こっなんです。私は小さい時分から水泳が上手で、この「飛込み」なんかも朝飯前の仕事だったので、そうして、岸から十四五間も離れた水面へ首を出した私は、立泳ぎという奴をやりながら、片手でブルツと顔の水をはらつて、

「オーイ、飛込んで見ろ」

と友達に呼びかけました。すると、友達は無論何の気もつかないで、

「よし」と云いながら、私と同じ姿勢をとり、勢よく私のあとを追つてそこへ飛込みまし

た。

ところが、しぶきを立てて海へ潜つたまま、彼は暫くたつても再び姿を見せないではありませんか……。私はそれを予期していました。その海の底には、水面から一間位の所に大きな岩があつたのです。私は前持つてそれを探つて置き、友達の腕前では「飛込み」をやれば必ず一間以上潜るにきまつている、随つてこの岩に頭をぶつけるに相違ないと見込みをつけてやつた仕事なのです。御承知でもありませんが、「飛込み」の技は上手なものの程、この水を潜る度が少いので、私はそれには十分熟練していたものですから、海底の岩にぶつかる前にうまく向うへ浮上つて了つたのですが、友達は「飛込み」にかけてはただほんの素人だったので、真逆様に海底へ突入つて、いやという程頭を岩へぶつけたに相違ないのです。

案の定、暫く待つていますと、彼はポツカリと鮪まぐろの死骸の様に海面に浮上りました。そして波のまにまに漂つています。云うまでもなく彼は氣絶しているのです。

私は彼を抱いて岸に泳ぎつき、そのまま部落へ駈け戻つて、宿の者に急をつげました。そこで出漁を休んでいた漁師などがやつて来て友達を介抱して呉れましたが、ひどく脳を打つた為でしょう。もう蘇生そせいの見込みはありませんでした。見ると、頭のとっぺんが五六



寸切れて、白い肉がむくれ上っている。その頭の置かれてあつた地面には、おびただ夥しい血潮が赤黒く固っていました。

あとにも先にも、私が警察の取調を受けたのはたった二度きりですが、その一つがこの場合でした。何分人の見ていない所で起つた事件ですから、一応の取調べを受けるのは当然です。併し、私とその友達とは親友の間柄でそれまでにいさかい一つした事もないと分つていたので、又当時の事情としては、私も彼もその海底に岩のあることを知らず、幸い私は水泳が上手だった為に危い所をのがれたけれども、彼はそれが下手だったばっかりにこの不祥事を惹ひきおこ起したのだということが明白になったものですから、難なく疑うたがいは晴れ、私は却つて警察の人達から「友達をなくされてお気の毒です」と悔みの言葉までかけて貰う有様でした。

いや、こんな風に一つ一つ实例を並べていたんでは際限がありません。もうこれ丈け申上げれば、皆さんも私の所謂絶対に法律にふれない殺人法を、大体御分り下すつたことと思ひます。凡てこの調子なんです。ある時はサーカスの見物人の中に混つていて、突然、ここで御話するのは恥しい様な途方もない変てこな姿勢を示して、高い所で綱渡をしていた女芸人の注意を奪い、その女を墜落させて見たり、火事場で、我子を求めて半狂乱の様

になつていたどこかの細君に、子供は家の中に寝かせてあるのだ「ソラ泣いている声が聞えるでしょう」などと暗示を与えて、その細君を猛火の中へ飛込ませ、つい焼殺して了つたり、或は又、今や身投げをしようとしている娘の背後から、突然「待った」と頓狂な声をかけて、そうでなければ、身投げを思いとまったかも知れない其娘を、ハツとさせた拍子に水の中へ飛込ませて了つたり、それはお話しすれば限りもないのですけれど、もう大分夜も更けたことですし、それに、皆さんもこの様な残酷な話はもうこれ以上御聞きになりたくないでしょうから、最後に少し風変わりなのを一つ丈け申上げてよすことに致しましう。

今まで御話しました所では、私はいつも一度に一人の人間を殺している様に見えますが、そうでない場合も度々あつたのです。でなければ、三年足らずの年月の間に、しかも少しも法律にふれない様な方法で、九十九人も人を殺すことは出来ません。その中でも最も多人数を一度に殺しましたのは、そうです、昨年しんねんの春のことでした。皆さんも当時の新聞記事できつと御読みのことと思ひますが、中央線の列車が顛覆てんぷくして多くの負傷者や死者を出したことがありますね、あれなんです。

なに馬鹿馬鹿しい程雑作ぞうさくもない方法だったので、それを実行する土地を探すのには

可也かなり手間どりました。ただ最初から中央線の沿線ということだけは見当をつけていました。というのは、この線は、私の計画には最も便利な山路を通っているばかりでなく、列車が顛覆した場合にも、中央線には日頃から事故が多いのですから、ああ又かという位で他の線程目立たない利益があつたのです。

それにしても、註文通りの場所を見つけるのにはなかなか骨が折れました。結局M駅の近くの崖を使うことに決心するまでには、十分一週間はかかりました。M駅には一寸した温泉場がありますので、私はそこのある宿へ泊り込んで、毎日毎日湯に入ったり散歩をしたり、如何いかにも長逗留ながどまりの湯治客らしく見せかけようとしたのです。その為には又十日余り無駄に過ぎねばなりませんでしたが、やがてもう大丈夫だという時を見計らつて、ある日私はいつもの様にその辺の山路を散歩しました。

そして、宿から半里程のある小高い崖の頂上へ辿たどりつき、私はそこでじつと夕闇の迫つて来るのを待つていました。その崖の真下には汽車の線路がカーブを描いて走っている、線路の向う側はこちらとは反対に深いけわしい谷になって、その底に一寸した谷川が流れているのが、霞む程遠くに見えています。

暫くすると、あらかし予め定めて置いた時間になりました。私は、誰れも見ているものはなかつ

たのですけれど、態々一寸つまづく様な恰好をして、これも予め探し出して置いた一つの大きな石塊いしころを蹴飛ばしました。それは一寸蹴りさえすればきつと崖から丁度線路の上あたりへころがり落ちる様な位置にあつたのです。私は若しやりそこなえば幾度でも他の石塊でやり直すつもりだったので、見ればその石塊はうまい工合に一本のレールの上のつかっています。

半時間の後には下り列車がそのレールを通るのです。その時分にはもう真暗になっていくのでしようし、その石のある場所はカーブの向側なのですから、運転手が気附く筈はありません。それを見定めると、私は大急ぎで、M駅へと引返し（半里の山路ですからそれに十分じゅうぶん三十分以上を費しました）その駅長室へ這入って行って「大変です」とさも慌てた調子で叫んだものです。

「私はここへ湯治に来ているものですが、今半里計り向うの、線路に沿った崖の上へ散歩に行っていて、坂になった所を駆けおりようとす拍子にふと一つの、石塊を崖から下の線路の上へ蹴落してしまいました。若しあそこを列車が通ればきつと脱線します。悪くすると谷間へ落ちる様なことがないとも限りません。私はその石をとりのけ様と色々道を探したのですけれど、何分不案内の山のことですから、どうにもあの高い崖を下る方法がない

のです。で、ぐずぐずしているよりはと思つて、ここへ駆けつけた次第ですが、どうでしょう。至急あれを、取りのけて頂く訳には行きませんかでしょうか」

と如何にも心配そうな顔をして申しました。すると駅長は驚いて、

「それは大変だ、今下り列車が通過した処ところです。普通ならあの辺はもう通り過ぎて了つた頃ですが……」

というのです。それが私の思う壺でした。そうした問答を繰り返している内に、列車顛覆死傷数知らずという報告が、僅かに危地を脱して駆けつけた、その下り列車の車掌によつて齎もたられました。さあ大騒ぎです。

私は行がかり上一晩Mの警察署へ引ばられました。考えに考えてやった仕事です。手落ちのあろう筈はありません。無論私は大変叱られましたでしたが、別に処罰を受ける程のこともないのでした。あとで聞きますと、その時の私の行為は刑法第二百二十九条とかにさえ、それは五百円以下の罰金刑に過ぎないのですが、あてはまらなかつたのだそうです。そういう訳で、私は一つの石塊によつて、少しも罰せられることなしに、エーとあれは、そうです、十七人でした。十七人の命を奪うことに成功したのでした。

皆さん。私はこんな風にして九十九人の人命を奪つた男なのです。そして、少しでも悔

ゆる所か、そんな血腥い刺戟にすら、もう飽きあきして了って、今度は自分自身の命を犠牲にしようとしている男なのです。皆さんは、余りにも残酷な私の所行しよぎょうに、それぞれの様に眉をしかめていらつしやいます。そうです。これらは普通の人には想像もつかぬ極悪非道の行いに相違ありません。ですが、そういう大罪悪を犯してまで免れ度のがい程の、ひどいひどい退屈を感じなければならなかったこの私の心持も、少しはお察しが願ひ度いのです、私という男は、そんな悪事をでも企らむ他には、何一つ此人生に生甲斐を発見するところが出来なかつたのです。皆さんどうか御判断なすつて下さい。私は狂人なのでしょうか。あの殺人狂とでもいうものなのでしょうか。

斯様かようにして今夜の話手の、物凄くも奇怪極まる身の上話は終つた。彼は幾分血走つた、そして白眼勝ちにドロンとした狂人らしい目で、私達聴者ききての顔を一人一人見廻すのだった。併し誰一人之れこに答えて批判の口を開くものもなかつた。そこには、ただ薄気味悪くチロチロと瞬またたく蠟燭の焰に照らし出された、七人の上氣した顔が、微動さえしないで並んでいた。

ふと、ドアのあたりの垂絹の表に、チカリと光つたものがあつた。見てみると、その銀

色に光つたものが、段々大きくなっていた。それは銀色の丸いもので、丁度満月が密雲を破つて現れる様に、赤い垂絹の間から、徐々に全き円形まったを作りながら現われているのであった。私は最初の瞬間から、それが給仕女の両手に捧げられた、我々の飲物を運ぶ大きな銀盆であることを知っていた。でも、不思議にも万象を夢幻化しないでは置かぬこの「赤い部屋」の空気は、その世の常の銀盆を、何かサロメ劇の古井戸の中から奴隷がヌツとつき出す所の、あの予言者の生首の載せられた銀盆の様にも幻想せしめるのであった。そして、銀盆が垂絹から出切つて了うと、その後から、青竜せいりゅうとう刀の様な幅の広い、ギラギラしたダンビラが、ニョイと出て来るのではないかとさえ思われるのであった。

だが、そこからは、唇の厚い半裸体の奴隷の代りに、いつもの美しい給仕女が現れた。そして、彼女がさも快活に七人の男の間を立廻つて、飲物を配り始めると、その、世間とはまるでかけ離れた幻の部屋に、世間の風が吹き込んで来た様で、何となく不調和な気がし出した。彼女は、この家の階下のレストランの、華やかな歌舞と乱酔とキヤアという様な若い女のしだらな悲鳴などを、フワフワとその身边に漂わせていた。

「そうら、射つよ」

突然Tが、今までの話声と少しも違わない落着いた調子で云つた。そして、右手を懐中

へ入れると、一つのキラキラ光る物体を取出して、ヌーツと給仕女の方へさし向けた。

アツという私達の声と、バン……というピストルの音と、キャツとたまぎる女の叫びと、それが殆ど同時だった。

無論私達は一齐に席から立上った。併しああ何という仕合せなことであつたか、射たれた女は何事もなく、ただこれのみは無慚むざんにも射ちくだかれた飲物の器を前にして、ボンヤリと立っているではないか。

「ワハハハ……」T氏が狂人の様に笑い出した。

「おもちゃだよ、おもちゃだよ。アハハハ……。花ちゃんまんまと一杯食つたね。ハハハ……」

では、今なおT氏の右手に白煙をはいているあのピストルは、玩具に過ぎなかつたのか。「まあ、びつくりした……。それ、おもちゃなの？」Tとは以前からお馴染なじみらしい給仕女は、でもまだ唇の色はなかつたが、そういうながらT氏の方へ近づいた。

「どれ、貸して御覧なさいよ。まあ、ほんものそっくりだわね」

彼女は、てれかくしの様に、その玩具だという六連発を手にとって、と見こうみしていたが、やがて、



「くやしいから、じゃ、あたしも射ってあげるわ」

いかと思うと、彼女は左腕を曲げて、その上にピストルの筒口を置き、生意気な恰好でT氏の胸に狙いを定めた。

「君に射てるなら、射ってごらん」T氏はニヤニヤ笑いながら、からかう様に云った。

「うてなくってさ」

バン……前よりは一層鋭い銃声が部屋中に鳴り響いた。

「ウウウウ……」何とも云えぬ気味の悪い唸うなりごえ声こゑがしたかと思うと、T氏がヌツと椅子から立上って、バツタリと床の上へ倒れた。そして、手足をバタバタやりながら、苦悶くもんし始めた。

冗談か、冗談にしては余りにも真に迫ったもがき様ではないか。

私達は思わず彼のまわりへ走りよった。隣席となりにいた一人が、卓上の燭台をとって苦悶者の上にさしつけた。見ると、T氏は蒼白な顔を痙攣けいれんさせて、丁度傷ついた蚯蚓みみずが、クネクネはね廻る様な工合に、身体中の筋肉を伸ばしたり縮めたりしながら、夢中になつてもがいていた。そしてだらしなくはだかつたその胸の、黒く見える傷口からは彼が動く度に、タラリタラリとまっ紅かな血が、白い皮膚を伝つて流れていた。

玩具と見せた六連発の第二発目には実弾が装填してあったのだ。

私達は、長い間、ボンヤリそこに立ったまま、誰一的人身動きするものもなかった。奇怪な物語りの後のこの出来事は、私達に余りにも烈しい衝動を与えたのだ。それは時計の目盛から云えば、ほんの僅かな時間だったかも知れない。けれども、少くともその時の私には、私達がそうして何もしないで立っている間が、非常に長い様に思われた。なぜならば、その咄<sup>とっさ</sup>の場合に、苦悶している負傷者を前にして、私の頭には次の様な推理の働く余裕が十分あったのだから。

「意外な出来事に相違ない。併し、よく考えて見ると、これは最初からちやんと、Tの今夜のプログラムに書いてあった事柄なのではあるまいか。彼は九十九人までは他人を殺したけれど、最後の百人目だけは自分自身の為に残して置いたのではないだろうか。そして、そういうことには最もふさわしいこの『赤い部屋』を、最後の死に場所に選んだのであるまいか、これは、この男の奇怪極る性質を考え合せると、まんざら見当はずれの想像でもないのだ。そうだ。あの、ピストルを玩具だと信じさせて置いて、給仕女に発砲させた技巧などは、他の殺人の場合と共通の、彼独特のやり方ではないか。こうして置けば、下手人の給仕女は少しも罰せられる心配はない。そこには私達六人もの証人があるのだ、つ

まり、Tは彼が他人に対してやったと同じ方法を、加害者は少しも罪にならぬ方法を、彼自身に応用したものでないか」

私の外の人達も、皆夫々それぞれの感慨に耽つている様に見えた。そして、それは恐らく私のものと同じだったかも知れない。実際、この場合、そうとより他には考え方がないのだから。

恐ろしい沈黙が一座を支配していた。そこには、うつぶした給仕女の、さも悲しげにすすり泣く声が、しめやかに聞えているばかりだった。「赤い部屋」の蠟燭の光に照らし出された、この一場の悲劇の場面は、この世の出来事としては余りにも夢幻的に見えた。

「ククククク……」

突如、女のすすり泣の外に、もう一つの異様な声が聞えて来た。それは、最早や藻掻くもがことを止めて、ぐったりと死人の様に横わっていた、T氏の口から洩れるもらしく感じられた。氷の様な戦慄が私の背中を這い上った。

「クツクツクツクツ……」

その声は見る見る大きくなって行つた。そして、ハツと思ふ間に、瀕死ひんしのT氏の身体からだがヒョロヒョロと立上つた。立上つてもまだ「クツクツクツクツ」という変な声はやまなか

った。それは胸の底からしぼり出される苦痛の唸り声の様でもあった。だが……、若しや……才、矢張りやはそうだったのか、彼は意外にも、さい前ぜんから耐らないおかしさをじつと嘯み殺していたのだった。「皆さん」彼はもう大声に笑い出しながら叫んだ。「皆さん。分りましたか、これが」

すると、ああ、これは又どうしたことであろう。今の今まであの様に泣入っていた給仕女が、いきなり快活に立上ったかと思うと、もうもう耐らないという様に、身体をくの字にして、これも亦また笑いこけるのだった。

「これはね」やがてT氏は、あつけにとられた私達の前に、一つの小さな円筒形のを、掌にのせてさし出しながら説明した。「牛の膀ぼうこう胱こうで作った弾丸たまなのです。中に赤インキが一杯入れてあつて、命中すれば、それが流れ出す仕掛けです。それからね。この弾丸が偽物だったと同じ様に、さつきからの私の身の上話というものはね、始めから了いまで、みんな作りごとなんですよ。でも、私はこれで、仲々お芝居はうまいものでしょう……。さて、退屈屋の皆さん。こんなことでは、皆さんが始終お求めなすつている、あの刺戟とやらにはなりませんでしょうか……」

彼がこう種明しをしている間に、今まで彼の助手を勤めた給仕女の気転で階下のスイツ

チがひねられたのであろう、突如真昼の様な電燈の光が、私達の目を眩惑げんわくさせた。そして、その白く明るい光線は、忽ちにして、部屋の中に漂っていた、あの夢幻的な空気を一掃してしまった。そこには、曝露ばくろされた手品の種が、醜いむくろを曝していた。緋色の垂絹にしろ、緋色の絨氈にしろ、同じ卓子掛テーブルかけや肘掛椅子、はては、あのよしありげな銀の燭台までが、何とみすぼらしく見えたことよ。「赤い部屋」の中には、どこの隅を探して見ても、最早や、夢も幻も、影さえ止とどめていないのだった。



# 青空文庫情報

底本：「江戸川乱歩全集 第1巻 屋根裏の散歩者」光文社文庫、光文社

2004（平成16）年7月20日初版1刷発行

2012（平成24）年8月15日7刷発行

底本の親本：「江戸川乱歩全集 第七巻」平凡社

1931（昭和6）年12月

初出：「新青年」博文館

1925（大正14）年4月

※初出時の表題は「連続短篇探偵小説（三）」です。

※「飽き飽き」と「飽きあき」、「深切」と「親切」の混在は、底本通りです。

※底本巻末の編者による語注は省略しました。

入力：門田裕志

校正：岡村和彦

2016年6月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。



# 赤い部屋

江戸川乱歩

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>